

二月十九日。電腦笠岡ふるさ島づくり海社（以下島づくり海社）―高島支社が進めるIターン移住事業の第一号の移住者が島での生活を始める日。

普段はめったに着くことのないフェリーが高島港に到着した。中から姿を現したのは、これからこの島で生活することとなる二人の家族の荷物を乗せたトラック。港広場では、二人の歓迎セレモニーが行われ、その後、島民の有志と共に引越し作業が行われた。

明かりのない風景

高島の人口は約百四十人。人の流出と共に空き家が目立ちはじめ、夜になれば明かりの灯らない家ばかりの寂しい風景があった。

この状況をなんとかしようと、ひとりの島民が温めていた計画、それが「Iターン移住」だった。平成十四年に島づくり海社が設立され、各島が活性化への取り組みを本格化させたとき、高島では空き家対策としてこの計画に真っ先に乗り出した。

笠岡諸島

キーワードとして必ずあがった「笠岡諸島」。この2つを今後笠岡の将来にとって大きなカギ

で活性化のために動き出した。そしてこれからは…。それぞれ

まず、空き家の持ち主に対して、貸出に関するアンケート調査を行った。しかし、「盆や正月には帰省する」あるいは「先祖代々の家を貸すわけにはいかない」。そんな理由ですべての回答が「貸し出せない」というものだった。

動き出した計画を途中で投げ出すわけにはいかなかった。計画の発案者が身内を説得して、なんとか四軒の空き家を貸出に使えることになった。

昨年十月にインターネットで移住者を募った。その後、各メディアに取り上げられ、二百件近くの問い合わせが殺到。すぐさまに四軒の借り手が決まった。現在は、空き家の提供者待ちという状態だ。

移住者と島民

七月までに四世帯すべてが入居を終え、これまでに七人の「新しい島民」が生まれた。

島づくり海社高島支社長の河田達夫さんは語る。「移住者の人たちは、今のところ島民とも仲良くやっている。島民たちも、にぎやかになること、人が住むことはいいこと



▲島民の移住者に対する期待も大きい

だと実感してきているようだ。移住者たちの生活ぶりを見て、これなら家を貸してもいいという声も聞こえてくるようになった。」

また、河田さんは、移住者たちへの期待を込めてこんな話もしてくれた。「私たちは、移住してくる人たちがこの島の活性化につながる何かを持ってきてくれると思っている。新しい風を運び、新しい文化が育つ。そんな中でこの島が活気づけばいいが…。」

Iターン移住は島の活性化の切り札になるか

この移住事業の大きな問題、それは移住者の仕事。島民たちは、島の活性化のために若い年代の人たちに移住してほ

しいと願っている。高島には漁業や民宿などのごくわずかな働き口しかないため、そういった人たちは島外へ職を求めなくてはならない。しかし、島へ着く船の最終便が午後五時台という状況では、残業などの面で大きく制限されてしまふのだ。

これに対して、船の便数を増やすことが当分は望めない現在、島外へ就職・通学する人たちのためにチャーター船を出す方向で検討中だという。

人口の減少と空き家の増加という状況は他の島でも同じ。笠岡諸島全体でこのIターン移住を活用することはできるのだろうか。実際、高島としても他島へ働きかけているが、現時点では受け皿がない状態となっている。

何もないところから手探りで進めている今、島民たちもひとつひとつの課題に、真剣に取り組みながら、その難しさを実感している。しかし、このIターン移住事業が、大きく前進すれば、笠岡諸島の活性化のヒントを生み出してくれるのではないだろうか。